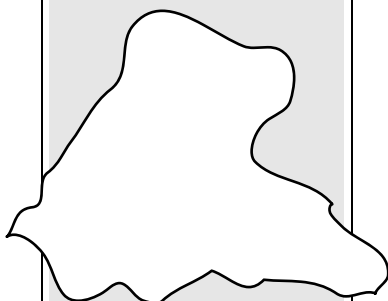


鏡石町



鏡石町長
遠藤 栄作



面積 31.25km²
人口 12,562人
(H26・9・1 現在)



▲阿武隈川支流鈴ノ川の源 高野池に飛来する白鳥

●鏡石町と阿武隈川

鏡石町は、福島県の「中通り」の中央南部に位置するコンパクトなまちで、比較的温暖な気候に恵まれており、阿武隈川と釈迦堂川に挟まれた河川域に肥沃な高地が広がっております。

明治40年には、オランダから乳牛と農機具とともに青銅の鐘が贈られ、後に岩瀬牧場と呼ばれる日本初の西洋式牧場が誕生し、唱歌である「牧場の朝」のモデルとなりました。

本町の東側を流れる阿武隈川は、玉川村と須賀川市に接し、その流域の成田地区陣ヶ丘から発見された旧石器・石刃（せきじん）は、「成田型ナイフ」と呼ばれ、福島県における最も古い時代のものとして、学術的にも高く評価されております。

また、「鏡石あやめ祭り」や「鏡石「牧場の朝」オランダ・秋祭り」などの交流イベントは人と人をつなぎ、町制施行50周年を記念して始められた「鏡石田んぼアート事業」は、農業の普及啓発や鏡石駅を中心としたまちなかの活性化等、新たな絆と未来への活力を育む場となっています。

本町は、昭和37年8月に町制を施行して以来、平成24年で町制施行50年を迎えることができました。これからの本町の更なる発展を実現させるため「鏡石町第5次総合計画」では、「かわる、かがやく、“牧場の朝”のまち かがみいし」をまちの将来像として、まちづくりを進めてまいります。

●取り組みの現状

阿武隈川の環境保全・水質保全については、生活排水対策が重要課題であると認識しているところであります。川を汚しているのは、基本的には各種の排水ですが、特に川を汚している原因は、家庭から出る生活雑排水と言われております。

生活雑排水の対策といたしまして「公共下水道事業」については、昭和53年から「阿武隈川上流流域下水道計画」に基づく「流域関連公共下水道事業」を進めております。平成26年4月1日現在の公共下水道供用開始区域内における水洗化率は87.6%となり、今後も市街地の拡大に合わせて事業区域の拡大と水洗化率の向上に努めてまいります。

農業用排水の水質保全や農業集落におけるし尿、生活雑排水等については、平成5年から「農業集落排水事業」として整備は既に完了しております。地元管理組合との連携のもと、水洗化のさらなる向上に努めてまいります。

また、平成7年から「合併処理浄化槽設置整備事業」として「公共下水道事業」と「農業集落排水事業」の事業区域外の区域で実施しています。

河川や水路は、治水対策として土や植生によらないコンクリート張り等の護岸整備が進んできたため、自然の浄化機能を失いつつあります。本町においても、生活排水対策を重要課題として位置づけ、今後も町民に対し生活排水対策の必要性について啓発を行うとともに、河川の環境保全を推進してまいります。

●未来へのメッセージ

水は人間にとって生命の源であり、日常生活には欠かすことのできないものです。また、快適な水環境は



▲成竜橋からみた阿武隈川下流

人の心に潤いとやすらぎを与えてくれます。こうした水及び水環境の重要性を知り、流域の水環境を良好に保全し、次世代に引き継いでいくことは私たちに課せられた責務であると認識しています。

阿武隈川と釈迦堂川を有する本町一帯は、先史時代から川沿いに人々が住みつき、定住していったものと思われます。その証拠に陣ヶ岡遺跡からは石器や縄文土器が出土し、奈良・平安期の遺跡からは製鉄所跡や工人の住居跡も見られています。

鏡石町は、雪解け水が水路を下る春、まちのあちこちに桜を愛でる輪が広がります。あやめが咲きそろふ夏、青々とした稲の波がどこまでも続きます。山々が錦に色づく秋、たわわに実った稲穂でまちは黄金色に染まります。北風が山から下りてくる冬、高野池には白鳥が舞い降ります。四季折々に表情を変える豊かな自然、本町には日本人が置き忘れてきたふるさとの原風景が大切に残されています。こうしたまちの財産ともいふべき豊かな自然を守り、伝えながら、まちが輝きを増すための個性として活かしていくことが私たちの使命です。

しかし、西白河郡矢吹町、石川郡玉川村、並びに本町の2町1村を境として流れる阿武隈川は、洪水の都度氾濫し、災害の常習地帯となっています。

特に、昭和61年8月5日に発生した台風10号による風水害の被害は甚大なものでありました。被害は、阿武隈川流域の3町村で、耕地の冠水面積496ha、住宅への浸水109戸、農作物の被害4億2千万円で、被害総額7億6千万円にも及びました。農作物は、水稻をはじめ、夏秋野菜であるトマト・きゅうり・いんげん等は支柱ごと流され、施設園芸のパイプハウスは見る影もなく壊され、茫然とする農家の姿には痛ましいものがありました。本町についてみると、阿武隈川左岸の越水破壊による被害は、住宅浸水51戸・250人、農地冠水150ha、農林水害、公共土木、成田簡易水道施設などでの被害総額は、約3億3千万円に及びました。

こうしたことから、今後も、水環境の保全対策に努めるとともに、阿武隈川・釈迦堂川に挟まれた町として、水害対策等災害に強いまちづくりを推進していかなければなりません。

鏡石町では、目指すまちの将来像を「かわる、かがやく、“牧場の朝”のまち かがみいし」とし「やさしさとふれあい」と「復興と進化」をまちづくりのキーワードにした輝きつづけるまちづくりを町民と共に築いていきます。そして、互いが支えあい生き生きと暮らせるまちづくりを目指してまいります。

須賀川市



須賀川市長
橋本 克也

面積 279.55km²
人口 76,892人
(H26・9・1 現在)



▲花とふれあう水辺の河川敷公園

●ふるさとの阿武隈川

須賀川市には、東部に阿武隈川、ほぼ中央部に釈迦堂川がゆったりと流れ、これまでの歴史の歩みを共に見守ってきました。

阿武隈川にある乙字ヶ滝は、水が乙字の形をして流れ落ちる姿からその名で呼ばれ、水かさが増すと川幅いっぱい落下する様が、小ナイヤガラの滝とも言われ、平成2年には「日本の滝100選」に選ばれています。元禄2年には、俳聖松尾芭蕉が奥の細道紀行でこの地を訪れ、その時に詠んだ「五月雨の 滝降りうづむ 水かさ哉」の句碑が滝見不動尊御堂の傍らに建立されています。また、江戸時代に阿武隈川流域の中で、舟運の最大の難所と言われたことから、滝の北側の岸壁には堀割り工事により船を通した運河跡が今なお残り、当時をしのぶことができます。

阿武隈川水系の釈迦堂川河川敷の両岸には、桜並木が延長約2kmにわたって続き、満開を迎える時期には、釈迦堂川を勇壮に泳ぐ鯉のぼりの姿が見られ、四季折々の美しい花々が咲き誇る「ふれあいロード」とともに「花とふれあう水辺の河川敷公園」として市内外の方々に親しまれています。

●取り組みの現状

(治水関連)

阿武隈川流域の治水計画は、非常時に備え災害に強い安全で安心して生活できる環境整備を進めるため、未築堤・未改修箇所を早期着手や、河道狭窄部の解消等について加入団体である阿武隈川上流改修促進期成同盟会を通して、関係機関や国・県へ要望するなど計画的かつ強力に推進しています。

また、平成10年度から平成12年度に実施した国の阿武隈川「平成の大改修」で、抜本的な治水対策を集中的に実施したことにより、その後に発生した洪水からの家屋被害や浸水被害が大幅に低減されるなど、総合的な治水策が進められています。

(利水関連)

乙字ヶ滝の上流約200mにつくられた滝堰から取水される浜田用水路は、明治25年復旧工事が竣工し、延長5kmにわたって浜田地区の農地を潤しています。

現在の水田灌漑面積は161haで、さらに畑地灌漑が64haに及んでいます。

また、本水路を利水した発電も行われており、明治38年に須賀川電気株式会社を設立し、翌39年4月には電気供給事業を開始しました。現在は、東北電力株式会社が前田川水力発電所として電力を供給しています。

(水質保全)

水と人との関わりとして、豊かで美しい水環境を保全するため、公共下水道、

農業集落排水、浄化槽設置整備事業をもって、集合処理方式と個別処理方式により、衛生的で快適な生活環境の確保や、河川などの公共用水域の水質保全等の汚水対策に取り組んでいます。

集合処理では、公共下水道事業（特定環境保全含む）及び農業集落排水事業を促進し、個別処理では合併浄化槽補助制度により整備を推進しています。

集合処理及び個別処理を併せた、汚水処理人口普及率は、平成25年3月末で、74.8%となり、また汚水処理施設は、特定環境保全公共下水道で2箇所、農業集落排水は13箇所に整備されています。



▲乙字ヶ滝

河川の水質汚濁防止対策については、釈迦堂川水系水質汚濁対策連絡協議会を推進母体とし、上水道の水源である釈迦堂川や、その支流河川の水質を保全する監視活動を継続するとともに、市内の小学生が水環境保全に対する意識の向上を図るため、水質浄化に効果のある微生物を活用した自浄作用を、自然環境学習に取り組んできました。

●今後の課題と対策

一般の生活や産業の活動及び自然環境の変化により、水質が悪化する傾向にある水源は、重点的な水質検査が求められます。河川の水質改善は、これまでの下水道の整備促進を含め、生活排水対策3事業を組み合わせた污水处理施設の整備により、一定の効果を上げていますが、今後とも污水处理施設の効率化を図るとともに、市街化区域内の雨水処理を進めるなど、適正な維持管理を行い、快適な生活環境づくりや良質な水環境の形成に努めます。

また、東京電力㈱福島第一原子力発電所事故による放射性物質の拡散などで、市民が抱える不安を払拭するため、除染事業と並行しながら、今後も水源ごとの放射線量モニタリング調査を継続し、市民が安全で安心して飲用できる上水道水源の水質保全に努めます。

●未来へのメッセージ

阿武隈川や、市内の中小河川の自然環境は、市民の快適な生活環境の形成を図るうえで、最も重要な役割を担う貴重な資源です。

この貴重な資源である阿武隈川等の環境保全を図る「須賀川市まちづくりビジョン2013」で掲げる将来都市像を実現するための施策である「豊かな自然環境と水質保全」について、多分野一体となって、より一層の河川環境保全活動の推進に努めます。

快適で魅力ある水環境を次世代に継承していくことが、現代を生きる私たちに課せられた使命であり、その実現のため流域市町村との連携を密にしながら、地域住民の総力を結集して自然環境の整備に努めます。

母なる阿武隈川水系の環境保全を通して、将来を担う子どもたちが「住んで良かった」「住んでみたい」と思える環境づくりを実行します。

郡山市



郡山市長
品川 萬里



面積 757.06km²
人口 328,812人
(H26・9・1 現在)



▲鬼生田橋付近（郡山市日和田町・西田町）

●郡山市と阿武隈川

郡山市内には、逢瀬川や大滝根川、笹原川など多くの川が流れています。それらの多くが支流として阿武隈川に流入しています。これらの川は、上流から種々の堆積物を運び、沿岸や河口に沖積地を作ってきました。

古墳時代には、阿武隈川の両岸に大小様々な古墳が造られ、中でも阿武隈川東方にある大安場古墳は東北最大の前方後方墳であり、腕輪型石製品や壺形土器が出土し、その貴重さから国の史跡に指定されています。

また、江戸時代には奥州街道の整備に伴い郡山に宿駅が造成されました。阿武隈川には御代田の渡し、金屋の渡しのほか、阿久津・福原・行合・横川・梅沢・鬼生田の渡しができました。これらの渡しを舟で渡り、守山に行く「守山通り」、三春に行く「三春通り」、それらはさらに浪江や平・江名などへの浜街道に通じており、魚・塩などの海産物が入ってきました。物流が盛んになるにつれ発展が進み、郡山は宿場町へと昇格し、現在の郡山市の礎を築きました。

【河川環境の美化】

郡山市は、昭和39年に新産業都市に指定されて以来、工業や人口の集中、自動車交通量の増加に伴い公害の問題が多発するようになったことから、これに対応すべく、昭和45年に公害防止条例を制定、同51年に公害対策センターを新設し、阿武隈川とそれに流入する支流の水質汚濁の監視にあたり、工場等特定施設の規制強化に努めました。その一方で、生活排水による水質汚濁の割合が高くなり、特に逢瀬川や笹原川の汚れが目立つようになったことから、本市では公共下水道の整備を含め生活排水対策に全力を傾注してきました。

本市の公共下水道の整備は、昭和33年から事業に着手し、JR郡山駅西側の地区から整備を進めていく中で、昭和45年に終末処理場を整備し、さらに同63年には県中浄化センターが供用開始されました。公共下水道の面的整備を進めたことにより、下水道処理人口普及率は大きく向上し、平成25年度末には71.2%で、農業集落排水施設及び合併処理浄化槽を合わせた汚水処理人口普及率は87.2%となっています。公共下水道の整備等により水質保全、生活環境の向上が図られた結果、近年における河川の汚濁状況は、徐々に改善しております。今後もさらなる水質保全、生活環境の向上のため、継続して汚水処理未普及地域の解消に努めてまいります。

【治水対策】

郡山市は、これまで幾度となく阿武隈川などによる大規模な浸水被害に見舞われてきました。古くは享保8年の水害に始まり、昭和16年、昭和22年、そして戦後最大の出水を記録した昭和61年の水害などがありました。近年では、平成10年、平成14年、平成23年に大規模な水害が発生しています。

これらの被害に対して、様々な治水対策が実施され、大正8年には国の直轄事業として河川改修が始まり、複雑に蛇行していた河道を大規模にショートカットする整備がなされました。現在でも、一部に元の河道が残っていることが確認

できます。また、平成10年の水害の後には、「平成の大改修」と呼ばれる大規模な事業が約800億円の事業費を費やして実施され、無堤防地区の解消が図られ、これにより、堤防が決壊するような外水氾濫の被害は大幅に減少しました。一方、市街地に降った雨が阿武隈川に排水されないことで起こる内水氾濫がたびたび発生しており、この対策が急務となっています。

このような中、郡山市では、河川改修や浸水被害が頻発する地区を中心に雨水幹線及びポンプ場などのハード整備に加え、浄化槽転用による雨水貯水槽等設置や止水板設置等に対する補助、浸水に関する危険度を示す浸水ハザードマップ作成による市民への情報提供など、ソフト対策にも取り組んでおります。



▲郡山の市街地を流れる阿武隈川

●今後の課題と取り組み

阿武隈川を取り巻く課題は、浸水の対策と水質の保全の大きく2つがあげられます。

近年の集中豪雨は、限られた地域で短時間に激しい雨が降る傾向がみられます。加えて、都市化の進展によって、これまで地表面が保持していた雨水浸透機能が低下したこともあり、雨水が短時間に下水道施設等へ集中することにより既存施設の雨水排除能力を上回る状況を生み、道路冠水や建物への浸水被害などがたびたび発生するようになりました。

浸水の対策として、従来の雨水の速やかな排除から、ゆっくり流す、雨水の利用といった方向への転換が必要なことから、郡山市の地形を考慮し、地域全体で雨水の流出を抑制する、雨水が流出しにくいまちづくりを目的とした貯留浸透にも積極的に取り組むことが重要になります。郡山市では、今後もため池の調整池としての活用、公共施設や水田、耕作放棄地などを活用した貯留など、地形的な特性を考慮した雨水流出抑制施設を取り入れるとともに、国・県と緊密な関係を構築しながら浸水被害軽減に取り組んでまいります。

また、公共用水域の水質保全がより一層求められていることから、水質保全に関する意識啓発に努めるとともに、公共下水道の整備を推進し、接続（水洗化）の普及促進を図るとともに合流式下水道の改善を進めることにより、阿武隈川をはじめとする公共用水域への環境負荷の軽減にも努めてまいります。

●未来へのメッセージ

市内の河川敷は野生動植物の宝庫です。初夏には、郡山市の鳥でもあるカッコウがさえずり、冬にはハクチョウやカモ類が多く飛来します。カッコウはオオヨシキリやモズなどの巣に卵を預け育ててもらおうという習性を持っています。つまり、カッコウにとっては、ほかの鳥たちが生きていける豊かな自然がなくてはならないのです。

市制施行90周年・合併50年を迎えた本市にとって、先人たちが残してくれたこの豊かな環境を損なうことなく、より良いものとして将来の世代に引き継いでいくことは、私たちに課せられた重要な責務です。今後も、阿武隈川の良好な環境の保全に向け、各種施策に取り組んでまいります。

本宮市



本宮市長
高松 義行

面積 87.94km²
人口 30,518人
(H26・9・1 現在)



▲舟こぎ競争

●本宮市と阿武隈川

「福島へのそまち もとみや」は、福島県の中央部に位置し、高速交通網が結節する交通の要衝としての特性を生かし、工業を基幹とした商業と農業のまちです。平成19年1月1日に本宮町と白沢村が合併し、県内13番目の市として本宮市が誕生しました。秀峰「安達太良山」を背景に、市の中心を豊かな「阿武隈川」が流れ、奥州街道の宿場町の面影をしのばせる街並みとともに、対岸には「阿武隈山系」の裾野に展開する田園と丘陵地が、豊かな景観を織りなしています。阿武隈川の流域に広がるまちは、中央部を北流する阿武隈川をはじめ、その支流である五百川、安達太良川、白岩川、仲川などの多くの河川が流れ、うるおい豊かな水辺空間に恵まれています。また東部は阿武隈山系の美しい山並みや丘陵地、農地が広がり、西部には安達太良山から連なる大名倉山を中心とした緑輝く山並みを有し、水と緑の素晴らしい自然環境・景観に恵まれています。

本市は、福島県の中央部に位置していることから、江戸時代に奥州街道の宿場町として栄えた歴史を持つ、古くからの交通の要衝地として栄え、現在も交通の要衝にある優位性と可能性を十分に活かし、「福島へのそまち」として未来に向けてのさらなる成長を目指すまちです。また、阿武隈川流域では農耕に適した平坦で肥沃な土地条件等を生かし、稲作を中心に野菜生産、畜産等が行われてきました。阿武隈川とその支流が豊かな恵みをもたらしたことは、流域に残る河岸段丘や自然堤防上の縄文・弥生・土師・須恵器の遺跡によって知ることができます。しかし、自然堤防上には中世・近世の遺跡も複合しているので、度重なる洪水の存在が推察できます。

●水に親しむ

農業用水としては、江戸時代初期から阿武隈川支流の五百川・安達太良川・百日川が活用され、特に本市南部の水田のほとんどは五百川の水により開発されました。阿武隈川の水は、飲料水としては昭和初期より、工業への用水としては近年になってから利用されるようになりました。また、白沢地区の農業灌漑排水事業として、阿武隈川を水源に農業用水の適期・適量供給に努め農業振興の基盤となっています。

河川的环境保全として生活環境の改善、公共用水域の水質保全及び浸水防止などを目的に、昭和50年度に阿武隈川上流流域下水道関連公共下水道として597haの全体計画を策定し事業に着手、現在まで整備を進めてきました。併せて、河川汚染の最大の原因は洗剤などの家庭雑排水であり、これらの対策として公共下水道計画区域外について合併処理浄化槽設置整備補助事業に取り組むとともに、農業集落排水事業を推進し、河川浄化対策を進めています。

阿武隈川の大いなる流れの中、もとみや夏まつりでは消防団員による舟こぎ競争が夏の風物詩となっています。そして、河岸から打ち上げられる花火は夜空と川面を艶やかに彩ってくれています。

●水とたたかう

本市は、昭和16年、昭和23年、昭和50年、昭和57年、昭和61年、平成10年、平成14年と大雨による増水によって、度重なる水害に見舞われ、家屋の浸水、田畑そして道路の冠水及び流失等の被害を受け、とりわけ旧本宮町の歴



▲河岸から望む安達太良連峰

史は、水とのたたかひの歴史であったと言っても過言ではありません。特に、昭和61年8月5日の集中豪雨により、床上浸水717戸、床下浸水314戸、田畑の冠水230ha（いずれも日本宮町データ）の甚大なる被害を受けました。

これらの水害を防ぐために国土交通省の「阿武隈川水系河川整備計画」に基づく本宮左岸地区の整備が進められており、引き続き阿武隈川本築堤の早期完成を推進し、合わせて雨水対策、橋梁の長寿命化など災害に強いまちづくりを進めています。

阿武隈川の築堤事業が市街地にかかるため、治水対策と一体となった、まちづくり整備を行なっていく必要があります。本宮の中心地区にふさわしい、魅力と求心力のある中枢機能の整備、多様な都市機能の整備のもとに、住み続けたい良質な住環境の整備を図ることとしています。さらに、地震や豪雨・土砂災害などの自然災害や火災などに対しても対応できるよう消防団等との連携と災害を防止する体制を整備し、市民が安心して暮らせるまちづくりを進めます。

●原発事故と今後

平成23年3月11日に発生した「東日本大震災」は、「原発事故」を誘発し、県内外においてかつて経験したことのないさまざまな問題を生じさせています。原発事故は、甚大な環境汚染を引き起す重大事故となり、この影響を受け特に子どもたちが自然と触れ合う機会が奪われました。震災以降、十分に運動する機会が減少している子どもたちが、季節や天候に関係なく思い切り体を動かして遊べるよう平成24年7月に「屋内遊び場」スマイルキッズパークをオープンしました。本年度は、子どもたちに自然の中での遊び場を通して、「冒険心」や「探究心」を高めてもらうために「屋外遊び場」の整備を進めスマイルキッズパークの拡充を図ります。

原発事故は、今もなお放射線による健康不安や風評被害による影響を残しており、早期復興に向けた取り組みを最優先に進めていきます。また教育環境の整備や就労の確保、子育て支援など、複合的に事業を展開します。市民のご意見、そして事業者などとの連携も図りながら、どのような施策が有効であるのかを判断し、夢と希望と活気に満ちた住環境整備を推進し「住んでみたい市 もとみや」を目指します。

川は、時には鋭く牙をむいたこともありました。人々は辛抱強く水と親しみ、いつくしみました。その一環としてできた「みずいろ公園」は水と自由に親しみ遊べるように、安達太良川のさくら堤と一体として整備された親水公園です。こうしてもとみやの水は、幾多の素晴らしい恵みと潤いをもたらしてくれました。



▲みずいろ公園